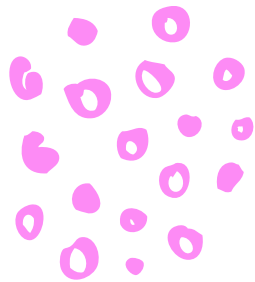


ゆりいか通信

第29号

令和8年9月



家庭に揺れる二つの気持ち

九月に入ったというだけで、なんだか心がそわそわします。行事の多い二学期に向けて、子どもたちがそれぞれのペースで学校との距離を探り始める時期です。登校している子も、そうでない子も、心のリズムが整うまでには時間がかかることがあります。特にそれまでに不登校を経験しているご家庭では、さまざまな思いでお子さんを見守っておられることでしょう。

不登校のお子さんのいらっしゃるご家庭では、「学校には行ってほしい」という気持ちと、「行けない子どもの心を受け止めるべき」というもう一つの気持ちがある。同じ家の中に同時に存在することがあります。兄弟がいる場合、その二つのまなざしは、親にとっても子どもにとっても、言葉にならない負荷となつて積み重なっていきます。一人には「無理しなくていいよ」と声をかけながら、もう一人には「学校生活を楽しんで」と伝える。その違いは、親の心にも、子どもの心にも、静かな揺れを生みます。

初期の段階では、「兄弟ま

う」という焦りが生まれることもあります。親として自然な感情ですが、その焦りはときに家庭の空気を少し張りつめたものにしてしまします。子どもはその空気を敏感に感じ取り、自分のペースを見失うこともあります。

我が家でも、娘が不登校になったあと、息子が五月雨登校を続けた時期がありました。車で送迎をしたり先生に連絡をとったり、無我夢中で過ごしていた頃です。「まだ学校に行けている息子まで休み始めてはいけない」という思いが体中からあふれ出ていたに違いありません。

今落ち着いて振り返れば、育つ場が学校であれ学校外であれ、子どもが自分の人生の主役と感じられる環境を整えられれば、それ以外は後から何とかもなるのではないでしょう。どの子どもたちも安心して育っていける環境を用意すること、**「学校に行く・行かない」という二択のはざま**で揺れる心を軽くし、もつと早い段階で広い視野に立つて育ちを支えていけるのではないかと思います。

Our Activities

「お友だちワーク」 改善検討会

先日、「不登校の子どもを支えているお友だちの気持ち」を疑似体験するワークの改善案について、スタッフで意見交流を行いました。6月の体験者からは、「学校に行く行かないに囚われなくてよい」と思っていたのに、友だちが登校するとほっとしている自分気づいた」「ぐるぐる期に入ると、何をしても欠席が続き悲しくなった」など、こちらが意図していた「揺れ」を実感していただけた声が寄せられました。

一方で、「ルールが複雑」「カード情報が多い」といった運営面の課題も明らかになりました。改善点を丁寧に検討し、話始めると次々にアイデアが生まれてきました。



京都市教委生徒指導課、再訪問

前回に引き続き、今回で2回目となる京都市教育委員会生徒指導課の訪問の機会をいただきました。前回はゆりいか研究会として提案してきた「高校生年代の若者の育ちの場」の必要性を中心にお伝えしましたが、その後、委員会の担当者の皆様の間でも検討を進めてくださっていました。今回はさらに具体的にどのような取り組みが可能かという点を話し合い、イメージを共有しました。若者が安心して参加できる場づくりに向けて、ゆりいかとして描いてきたイメージを行政の皆様と一緒に確認できたことは大きな一歩であり、今後の方向性をより明確にする機会となりました。

8月23日午後、「子どものトラウマと心理支援」について、中島陽大先生を講師にお迎えし、勉強会を開催しました。トラウマの定義やマルトリートメントが脳の発達に与える影響、学校で見られるサイン、PFA（心理的応急処置）の基本など、教育現場や支援の場で役立つ内容を体系的にお話ししていただきました。特に、発達障害とトラウマの症状が似て見えることや学校が子どもにとって『安全基地』となる重要性についての話は、日頃子どもや若者たちと接する上で大きな学びとなりました。

ゆりいか勉強会 開催報告



Upcoming Events

9/20
(日)

◆ フラッペ勉強会・交流会

今回は都合により中止することになりました。また次回お待ちしております。

10/10
(土)

♥ ゆりいかタイム

カリンバを弾きたい人も、他のことがしたい人も、のんびりしたい人もぜひどうぞ♪

10/18
(日)

◆ フラッペ勉強会・交流会

今回はカリンバを楽しむ会です。初めての方も、そうでない方もどうぞ。

11/8
(日)

♥ 西陣朝市マルシェ

地域イベントにブースを出しています。現在お手伝いしてくれる高若者を募集中です。



ゆりいか研究会

- ★ 教職員・若者支援者対象
- ◆ 保護者・若者支援者対象
- ♥ 高校生年代の若者対象

いずれも詳細はゆりいか研究会ウェブサイトをご覧ください。

今月のコラム

高校に入学はできたけれど・・・

小中学生の頃に不登校を経験し、がんばって高校へ進学したけれど、再び学校へ行けなくなるお子さんも少なくありません。

全日制高校ですと義務教育とは違い、欠席日数や単位、進級・卒業のことが現実的な問題として出てきます。

「このまま休んでいて大丈夫なのだろうか」

「留年したらどうしよう」

「転校したほうがいいのか」

子ども自身も親御さんも、レッスンで押しつぶされそうになりながら、毎日過ごしていることがあります。

一方、欠席日数の縛りがなく留年のない通信制高校という選択肢もあります。

けれど、入学できたからといって、すぐに元気に動き出せるとは限りません。

まだ心や身体のエネルギーが十分に回復していない時には、課題に取り組む、試験を受けてスクーリングに参加する、といっ

たことをこなすのも大変なことがあります。

そして、そんなお子さんを毎日そばで見守る親御さんも、一人で支え続けるのは本当にしんどいものです。

親御さんの不安が大きくなれば、その空気は子どもにも伝わっていきます。だからこそ、親御さんにも安心して話せる場所や、支えてくれる人が必要なのだと思います。

「しんどいのは、うちの子だけじゃない」

「こんなに悩んでいるのは、私だけじゃない」

そう知るだけでも、少しずつ気持ち軽くなっていくことがあります。

親の会では、それぞれの家庭での工夫を話したり、高校や進路についての情報を交換したりといった会話も支えになっていきます。

不登校の子どもの心をよく理解してくださる医師やカウンセラーに話をきいてもらうのも、大きな支えになります。学校の

先生が不登校の子どもものしんどさに寄り添ってくださると、親もどんなにか助かることでしょう。

親御さんが少しでも元気になることで、子どもは安心して家に居られるようになります。家が居場所になり、心の安定を得られるとエネルギーが充電できて自ら動き出します。焦らず、その子の回復のペースを大切にしながら、少しずつ元氣を取り戻していく姿を親同士で、また支援者とも共有しながら、一緒に見守っていききたいですね。

こころのそえぎ

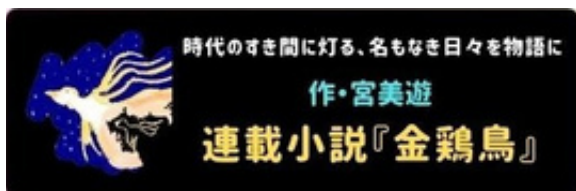
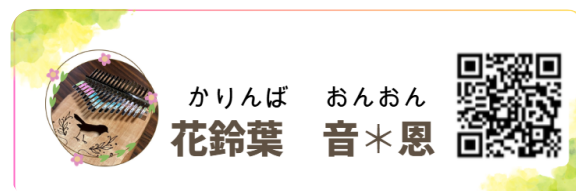
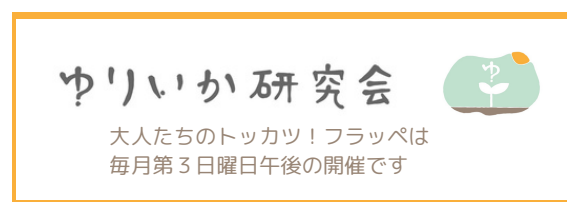
臨床心理士 福本早穂



Thanks to

THE PEOPLE WHO WARMLY SUPPORT US

支援者の皆様（順不同）



多喜誠子さま、杉本さま、宮坂 修平さま、T. OGAWAさま
クラウドファンディングおよびその他の形で協賛・寄付をしていただ
いたみなさまに心より感謝申し上げます。引き続きクラウドファンデ
ィングや協賛広告や直接の寄付も受け付けております。
関心をお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひお声がけください。



ゆりいか研究会として考えている「育ちの場」のイメージをご紹介します。

対象

- ・学校に足が向かない高校生
- ・学校と繋がっていない高校生年代の若者
- ・不登校のお友だちを支えている高校生

学校という枠組みを超えた
街全体がキャンパスになる

高校生年代の若者の育ちの場
(仮称) まちなか学園

つながり

- ・学校など
- ・フリースクール、居場所、各種支援団体
- ・ご家庭
- ・各種支援機関
- ・専門家

4つの機能で包括的に支援

【サテライトスペース】

- ・遠隔授業・自習等
- ・高校教員常駐
- ・在籍校と連携し出席扱いに

【コミュニティエリア】

- ・仲間・大人との出会い
- ・体験活動・諸講座
- ・「やりたい」をやってみる場

【サポートセンター】

- ・心理士・ソーシャルワーカーによるサポート
- ・学校・家庭・支援機関等との連携

【キャリア支援室】

- ・インターンシップ・就労支援の窓口
- ・スキルアップ・自己理解のサポート

学校連携

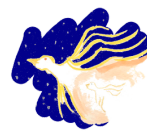
地域連携

家庭支援

運営・安全

評価・モニタリング

《連続小説》

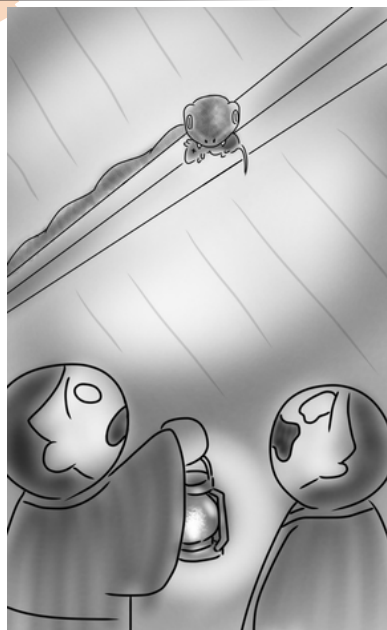


金鶏鳥

宮美遊

少年期（七）

辰郎がほの明るい光で上の方を照らして見ると、大きく長いヘビが、水車小屋の天井の梁（はり）に横たわりネズミをくわえていた。



想像もしていなかった光景に、二人は動きが止まった。ヘビが光に気付いたのか、ゆっくりこちらに顔を向けた。思わず信男が、うわっと声をあげる。

「アー恐（こわ）！」

「大変や！」

二人は草履もはかずに表へ飛び出した。

「長（ちよう）さーん、長さん助けてー」

大声で叫びながら近くに住む使用人の長次の家に行き、思いっきり戸を叩いた。長次は飛び起きてきたのだろうか、そばにあった着物を纏（まと）うと、

「どうしたんや？」

と着物の帯を締めながら尋ねた。「水車小屋の天井に大きなヘビがある」

辰郎が震えながら答えた。

「ママシやったらえらいことや」

長次は水車小屋に戻る辰郎の後に付いて走った。

小屋に入ると、辰郎はカンテラの灯をヘビの方に向ける。ヘビはまだ梁の上でじいっとしていた。

「辰っちゃん、長い棒ないか？」

「その隅（すみ）にある」

長次は水車小屋の隅にある長い棒を手を取った。

この小説は、明治・大正・昭和と激動の時代を乗り切った実在の人物をモデルとした小説です。先行き不透明な現代を生きるヒントが得られるような気がします。ぜひこれから楽しんでご一読ください。

絵：落葉画廊 挿絵：輝

編集後記

最近、カリンバの音に触れてくださる方が増えてきました。私たちの活動拠点、こりす西陣で開いている「カリンバのつどい」でも新しい参加者の方がたくさん加わり、ボランティアで伺っている高齢者向けの練習会でもお仲間になってくださる方が増えてきました。カリンバは初めての方も一緒に楽しむことができ、自然と笑顔がこぼれます。音が部屋にふわっと広がると、その場の空気までやわらかくなるようで、私自身も毎回心がほどこていきます。

来月にはフラップでのカリンバ体験会も予定しています。もっともっとカリンバの輪が広がればと思っています。

（恩庄か）

お知らせ

★次回の「ゆりいか勉強会」は12月20日午後、フラップ勉強会と二本立てで行うことになりました。詳細はウェブサイトをご覧ください。

★令和8年8月号までのゆりいか通信をウェブサイトに掲載しました。関心ありの方にご紹介ください。